50th

国立大学法人 滋賀医科大学

開学50周年記念誌

SUMS 50th

国立大学法人 滋賀医科大学

開学50周年記念誌

Shiga University of Medical Science
50th Anniversary

Together with Lake Country,
We Spread Our Wings to the World.
Towards a Half-Century of Medical Progress
and Further Leaps.

SHIGA UNIVERSITY OF MEDICAL SCIENCE

50th 滋賀医科大学

50周年記念集合写真　2024年1月4日　臨床講義室3

滋賀医科大学

Symbol Mark

50周年ロゴ

円の中心に琵琶湖を描き、地域をイメージ。
より一層の飛躍を目指し、滋賀の地域とともに、
世界にむけて発展・広がっていく様子を
イメージしたデザインです。

記念誌（Web版）は
こちらのQRコードから

Contents

50周年記念集合写真 …… 04
50周年スローガン・コンセプト …… 06
学長あいさつ …… 07
理事あいさつ …… 08
歴代学長 …… 10
理念・使命 …… 11
あゆみ …… 12
滋賀医大「三方よし」に込めた想い …… 21
関係者からのメッセージ …… 22
教育・研究・診療・地域医療の過去と未来 …… 26
数字で見る滋賀医科大学50年 …… 32
滋賀医科大学50景 …… 34
50周年記念事業に関わる学生の想い …… 40
組織等 …… 42
学歌 …… 44

Slogan

湖国とともに
世界に羽ばたく

～ 医療のあゆみ半世紀、さらなる飛躍へ ～

滋賀医科大学は、1974年に一県一医科大学の構想に基づき設立され、
2024年に開学50周年を迎えることになりました。
これまでの半世紀、地域に支えられ、地域医療に貢献しながら、
一歩一歩、あゆみを進めてまいりました。

開学50年を節目として、
今一度、本学の理念に込められた“想い”を胸に刻み、
県民のみなさまに感謝し、本学をご支援くださるすべての方々の期待に応え、
「湖国に滋賀医大あり!」とさらに世界にアピールできるよう、
より一層の飛躍を目指します。

輝かしい未来へ向かって！

Concept

1

これまでの50年、本学の発展に尽力くださった全ての方々、そして、見守り支援してくださった全ての方々に感謝を伝える機会とする。

2

50年に一度の喜びをともに分かち合えるよう、参加･連携型事業とし、学生や教職員、同窓生、教職員OB･OG等の一体感の醸成につなげる。

3

これからの未来を見据え、より強固な大学組織基盤をつくるため、同窓生や地域の方々をはじめ本学に関わってくださる関係者との繋がりを一層強化し、さらなる躍進を目指す。

国立大学法人滋賀医科大学長　**上本　伸二**

滋賀医科大学は1974年10月に開学し、2024年10月に開学50周年を迎えます。 開学当時の滋賀県はいわゆる医療過疎県でしたが、その医療環境の改善と向上を願う県民の皆さまの熱意に支えられた誘致運動の末に、本学が設置されました。 本学はこれまで、「地域に支えられ、地域に貢献し、世界に羽ばたく大学」という理念のもと、全人的医療を行う優れた医師･看護師の育成と特色ある医学･看護学研究、そして先進的な高度医療を実践してまいりました。

このたび、開学50周年を迎えるにあたり、本学は「湖国とともに世界に羽ばたく～医療のあゆみ半世紀、さらなる飛躍へ～」をスローガンに、学生･教職員のみならず卒業生や地域の皆さまに感謝を伝えるとともに、そのご期待に応え絆を深めるため、さまざまな記念事業を計画しました。 特に老朽化が著しい中庭や狭隘な福利棟･学生食堂のリニューアルを図り、学生が美しいキャンパスにおいて友情と愛校心を育みながら学業に励み、卒業生や地域の皆さまと交流できるアトラクティブな環境づくりを目指しました。

本学教職員一同は、開学50周年を本学の理念の一層の推進に向けた契機としてとらえ、これからも地域を支える良き医療人を輩出し、滋賀県の地域医療の最後の砦として、人々の命を守り、地域･社会の健康増進に貢献してまいります。そして、地域医療のサステナビリティを維持する使命こそが、本学と滋賀県のさらなる発展の礎であることをあらためて確認し、決意を新たにして取り組んでまいります。

これからの50年に向けて、今後とも皆さまからのご支援とご協力を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

理事あいさつ

滋賀医科大学50周年を迎えて

理事（研究・企画・国際担当）・副学長　**遠山　育夫**

はじめに滋賀医科大学50周年を迎えるにあたり、これまで滋賀医科大学を支えて下さった皆様に深く感謝するとともに、学生、教職員、卒業生、教職員OB・OG、県民をはじめとするステークホルダーの皆様と一緒にお祝いしたいと思います。

私は、1988年（昭和63年）4月に解剖学第2講座助手として滋賀医科大学に着任しました。以来、ブリティッシュコロンビア大学に留学していた1年を除き、1984年（昭和59年）から滋賀医科大学解剖学第2講座の越智淳三教授、木村宏助教授のもとで、大学院の研究に従事しておりましたので、40年にわたり滋賀医科大学で人生を過ごしてきました。滋賀医科大学での生活は、私の人生そのものと言っても過言ではありません。この間、看護学科が設立され、分子神経生物学研究センターをはじめとする附属の研究センターが次々と設立されました。本学の卒業生の数も増え、県内はじめ国内外で活躍するなど、滋賀医科大学の発展を目にすることができたことは、望外の喜びです。50年の歴史においては色々なことがありましたが、力を合わせて困難を乗り切る教職員の姿や滋賀医科大学を応援する県民の皆様に励まされてきたように思います。これまで滋賀医科大学をご支援くださったすべての方々に感謝するとともに、50周年を機会として、滋賀医大にかかわるすべての人たちとの絆を深め、心をひとつにして、更なる発展を祈念したいと思います。

50年の歩み、過去から現在、そして未来へ

理事（医療・労務担当）・副学長・病院長　**田中　俊宏**

滋賀医科大学が50周年を迎えたこと嬉しく思います。病院長として本学附属病院の歴史を振り返ると、医療・教育・研究面で改革の連続でした。医療では一貫して高度化を推し進めて滋賀県の最後の砦としての機能を維持するようにした歴史があります。最近では機能強化棟（完成時にはE病棟）が令和8年に完成します。救急・放射線治療・消化器内科機能がさらに充実します。診療科の整備も一貫して進められ、腫瘍内科・臨床遺伝相談科・病理診断科・形成外科・脳神経内科学講座・呼吸器内科学講座・血液内科学講座の設置を進めました。安心安全患者支援も澱みなく進められ、感染制御部・医療安全管理部・高難度医療・未承認医薬品等管理室を相次いで設置しています。これからも滋賀県の最後の砦としての高度医療を提供し、優秀な医療人を育成するために、皆様のご支援をお願いいたします。

滋賀県への感謝と貢献

理事（教育・学生支援・コンプライアンス担当）・副学長　**松浦　博**

滋賀医科大学開学50周年という記念すべき節目の年に滋賀医科大学の構成員として教職員、学生、卒業生の皆さまと一緒に喜び、お祝いできることを大変光栄に存じます。

滋賀医科大学はこれまで、医学科で4,444名、看護学科で1,798名、合計6,242名の卒業生を輩出し、滋賀県内はもとより全国の医療機関、大学、研究所でご活躍されています。特に、医学科卒業生のうち1,348名が滋賀県内の医療の第一線でご活躍中であり、この数は滋賀県内の医師数3,496名のうち38.6%を占めており、本学卒業生が滋賀県内の医療の中心的役割を担っていることがわかります。今後も、地域のさまざまな方々に支えられていることに感謝しながら、すぐれた医療と安心を地域に提供し、医学・看護学の発展と人類の健康増進に寄与する人材を育成することを続けていきたいと思います。

開学100周年に向けた新たなスタートを

理事（総務・財務・施設担当）・副学長　事務局長　**岩瀬　鎮男**

開学前の準備段階からこれまでの間に携わって来られました諸先輩方に、改めて敬意を表し、心よりお祝いを申し上げます。そして何より地域の皆様に育てていただいた50年でもあります。改めて感謝申し上げます。

本学は、国の「一県一医大」構想の下、昭和49年に開学し、大学の理念と使命を掲げ、その実現を目指して3C（創造Creation、挑戦Challenge、貢献Contribution）を推進してまいりました。

50周年を迎えるこのタイミングで、本学で仕事をさせていただくことに感謝し、これからも本学の事務組織、事務職員それぞれが、その推進力に成り得ているか、努力をしているか、サステナブルでアトラクティブな大学・事務組織であるかを常に問い続け、次の時代にしっかりとバトンを引き継いで行く重責を果たしてまいります。

さぁ皆さん、組織一丸となって、開学100周年に向けた新たなスタートを切りましょう。

変わりゆく地域医療を支えるために

理事（地域医療担当）　**辻川　知之**

滋賀医科大学が開学するまで、滋賀県の地域医療は、主に近隣他府県の医学部卒業生に支えられてきました。1974年に本学が開学し、現在では滋賀県で働く医師の38%を本学卒業生が占めるに至っています。この50年間で医療技術は大きく進歩した一方で、加速する少子高齢化により、地域医療を取り巻く環境はすっかり様変わりしています。治療と生命維持を主な目的とするcure（キュア）から、生活の質の維持・向上による身体的・精神的・社会的な健康保持を目的とするcare（ケア）に診療の軸が移ったことを背景に、誰がどこでどのように支えるかなど、いわゆる地域包括ケアシステムの中で医療を考えなければなりません。これからの医師や看護師の業務は、より多様化が進むと考えられます。本学が未来に向かって果たすべき役割として、地域医療を担う人材の育成は、さらに重要性を増すに違いありません。

歴代学長

初　代
脇坂 行一
1974年10月～1987年3月

第２代
佐野 晴洋
1987年4月～1993年3月

第３代
岡田 慶夫
1993年4月～1997年3月

第４代
小澤 和惠
1997年4月～2001年3月

第５代
吉川 隆一
2001年4月～2008年3月

第5代学長に就任した2001年(平成13年)は人気の高い小泉純一郎氏が首相に就任した年であり、いきなり構造改革の嵐の中へ投げ込まれた感じでした。3年後には国立大学が法人化され、本学も開学以来の変革を向かえることになりました。教職員の方々のご尽力により存在感のある大学へと深化されていることは喜ばしいかぎりです。「50にして天命を知る」の言葉通り、今後の活躍を願っております。

第６代
馬場 忠雄
2008年4月～2014年3月

滋賀医科大学は単科医科大学として、医療を支える人材の育成を使命としています。この機能的特徴を生かし、地域医療分野において特色のある医療を提供することが望まれています。また、医学･看護学教育において国際的な基準に準じた先駆的役割が期待されています。法人化になり、財政基盤が不安定化していますが、今こそ、特色のある国立大学が求められています。ますますのご発展を期待しています。

第７代
塩田 浩平
2014年4月～2020年3月

滋賀医科大学の卒業生とスタッフが地域医療･看護の中核を担い、全国そして世界に羽ばたいて活躍されることを期待しています。

大学と医療を取り巻く環境が激変する時代にあって、滋賀医科大学が「学びたい大学」、「働きたい病院」として選ばれ、有為の人材が結集して大きく発展するように願っています。

50周年が新たな飛躍のスタートとなることを祈念いたします。

地域に支えられ、地域に貢献し、世界に羽ばたく大学

滋賀医科大学は、「一県一医大」構想の下、医学部医学科の単科大学として昭和49年に開学しました。
附属病院の開院や大学院医学系研究科の設置を経て現在に至ります。

理念

滋賀医科大学は、地域に支えられ、地域に貢献し、世界に羽ばたく大学として、
医学･看護学の発展と人類の健康増進に寄与することを理念とする。

使命

1. 豊かな教養、確かな倫理観、高い専門的知識を有する信頼される医療人を育成する。
2. 研究倫理と独創性を有する研究者を養成し、特色ある研究を世界に発信する。
3. 信頼と満足を追求するすぐれた全人的医療を地域に提供し、社会に貢献する。

理念･使命の実現を目指して 3Cを推進しています

創　造
1.Creation
優れた医療人の育成と
新しい医学･看護学
医療の創造

挑　戦
2.Challenge
優れた研究による
人類社会･現代文明の
問題解決への挑戦

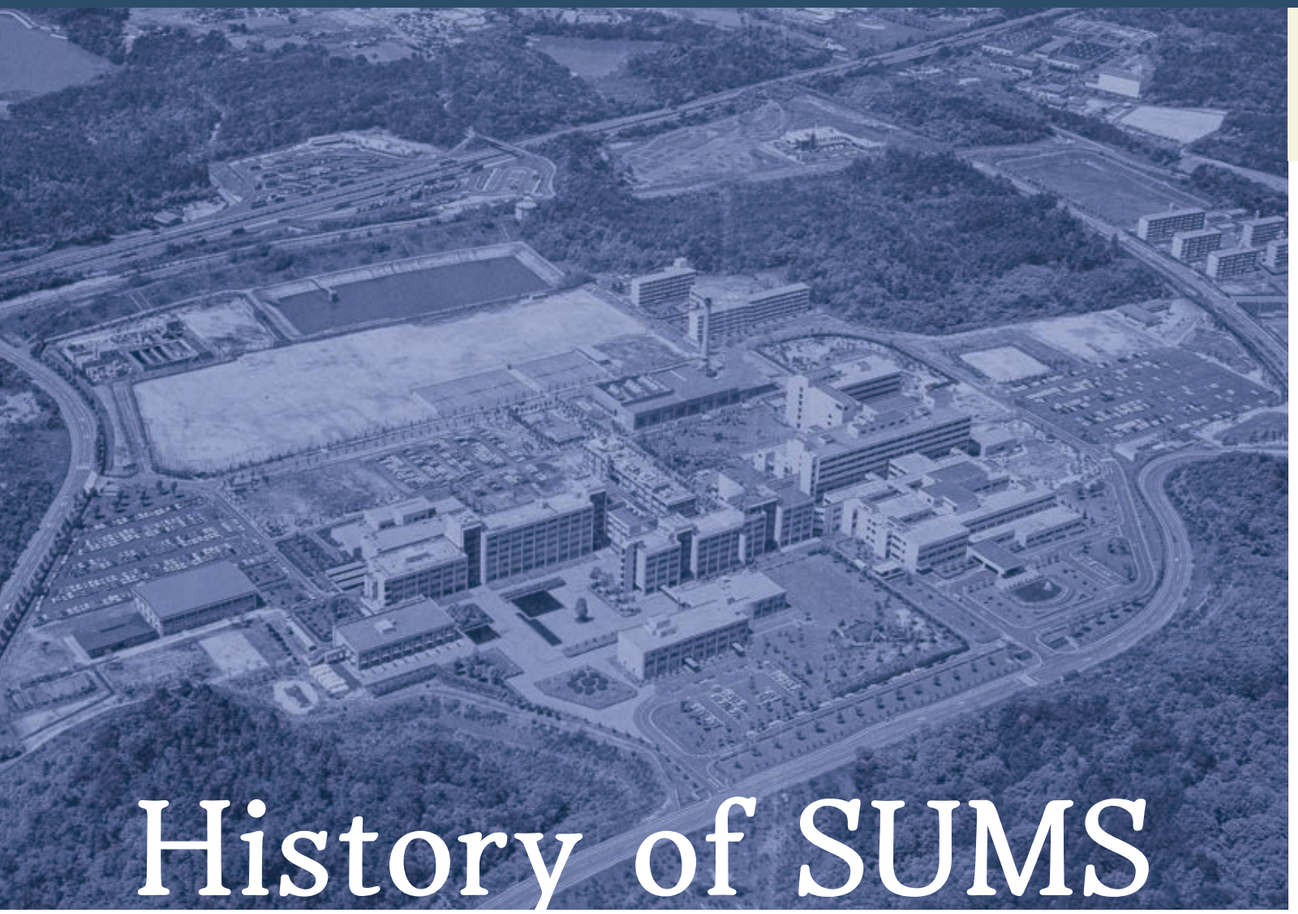
貢　献
3.Contribution
医学･看護学･医療を
通じた社会貢献

サステナブルでアトラクティブな大学
Sustainable and Attractive

キャッチコピー
AYUもう新たな医療の発展に!!!
「AYU」は若鮎の"鮎"と 歩むの"歩"をかけています　作者：医学科2年 田中翔さん

マスコットキャラクター
しがいたん
作者：医学科４年
岡本なつめさん

※このマスコットキャラクターとキャッチコピーは、
開学50周年記念事業の一環として学生企画WGが学部学生を対象に公募を行い、
全学及び湖医会による意向投票を経て決定されたものです（表示の学年は2024年1月現在）



History of SUMS

滋賀医科大学のあゆみ

滋賀医科大学は1974年、「一県一医大」構想の下、滋賀県に開学いたしました。
誘致運動から現在に至るまで試行錯誤と挑戦を繰り返した
50年のあゆみを写真とともに振り返ります。

第1章（　　～1974）県民の熱意に支えられた誘致運動

第2章（1974～1983）開学からの10年間

第3章（1984～2004）開学10周年から30周年へ

第4章（2004～　　）開学30周年から現在まで

1971
（昭和46年）

滋賀県が国立医科大学の設置に係る陳情書を
中央政界等に送付
文部省及び厚生省に設置を陳情

1972
（昭和47年）

「国立医科大学滋賀県誘致期成会」の大会が開催され、会長に野崎欣一郎滋賀県知事が選任され、事業計画等について決議

県知事名で文部大臣あてに、
「国立滋賀医科大学の設置希望の現状と整備計画」
を提出

1973
（昭和48年）

滋賀県厚生部に
「国立滋賀医科大学設立準備室」を設置

京都大学が準備校に決定
（文部省が滋賀県に国立医科大学を創設するための
創設準備事務を京都大学に委嘱）

1974
（昭和49年）

「滋賀医科大学創設準備室」を京都大学に設置

文部省関係者が
建設予定地を
実地調査

「滋賀医科大学設置計画書」を
文部省に提出

附属病院地鎮祭の実施

本校舎（大津市瀬田月輪町）の
一部完成により仮校舎から移転

1976
（昭和51年）

附属病院創設準備室を設置
（創設準備室長:中村恒男副学長）

第1回若鮎祭（大学祭）を開催

第1回解剖体慰霊式の挙行

開学記念式典の挙行

しゃくなげ会の発足

第1回医学部医学科入学宣誓式の挙行

1974
（昭和49年）

滋賀医科大学開学
（滋賀県守山市仮校舎）

1975
（昭和50年）

第1回入学試験及び合格者発表を実施

1978
（昭和53年）

第1回解剖体納骨慰霊法要の挙行

滋賀医科大学施設竣工並びに
医学部附属病院開院記念式典の挙行

滋賀医科大学附属病院の開院

1979
（昭和54年）

附属図書館の竣工
並びに
開館記念式典の挙行

1980
（昭和55年）

ヒポクラテスの樹を植樹

当時の様子

現在の様子

1981
（昭和56年）

第1回医学部医学科
卒業式の挙行

大学院医学
研究科の設置

第1回大学院医学研究科
入学宣誓式の挙行

1984
（昭和59年）

開学10周年
記念式典の挙行

1985
（昭和60年）

第1回
大学院医学研究科
学位授与式の挙行

1988
（昭和63年）

医学部附属病院
開院10周年
記念式典の挙行

学生主体による10周年記念交流会

医学部看護学科の設置

1994
（平成6年）

国際交流会館の竣工

1995
（平成7年）

医学部附属病院
特定機能病院として承認

第1回医学部看護学科入学宣誓式の挙行

1996
（平成8年）

看護学科校舎の竣工

1998
（平成10年）

医学科推薦入試に
「地域枠」を導入

分子神経生物学研究センターの
竣工

第1回医学部看護学科卒業式の挙行

医学系研究科看護学専攻修士課程の設置

医学系研究科看護学専攻
修士課程の入学宣誓式の挙行

1999
（平成11年）

コラボレーションセンター
（附属図書館、マルチメディアセンター）の竣工

医学部附属病院
IVMR棟施設の竣工

2000
（平成12年）

第1回
大学院医学系研究科修士課程
看護学専攻学位授与式の挙行

2003
（平成15年）

動物生命科学研究センター棟の竣工

2004
（平成16年）

医学部附属病院
日本病院機能評価認定を取得

NMR研究実験棟の竣工

2004
（平成16年）

国立大学法人法の施行に伴い、国立大学法人滋賀医科大学が設立

開学30周年記念式典を挙行

2006
（平成18年）

バイオメディカル・イノベーションセンターの竣工

2007
（平成19年）

地域「里親」による学生支援プログラムが文部科学省「学生支援GP」に採択

滋賀医科大学保育所の設置

2008
（平成20年）

医学部附属病院
開院30周年記念式典の挙行

医学部附属病院新病棟（D病棟）の竣工

2009
（平成21年）

クリエイティブモチベーションセンターの竣工

2010
（平成22年）

「滋賀県地域医療再生計画」に基づき、滋賀県、東近江市、（独）国立病院機構（NHO）と協定を締結し、寄附講座「総合内科学講座」及び「総合外科学講座」をNHO滋賀病院（現NHO東近江総合医療センター）に設置。
※「総合内科学講座」及び「総合外科学講座」は、2014年（平成26年）から本学講座に移行

敷地内全面禁煙・禁煙宣言

2012
（平成24年）

医学部附属病院 病院再開発記念式典の挙行

2013
（平成25年）

アジア疫学研究センター
（現NCD疫学研究センター）の竣工

開放型基礎医学教育センター
（メディカルミュージアム）オープン

第4章（2004～）

100周年に向けて、さらなる飛躍へ

2022
（令和4年）

Cadaver Surgical Training（CST）の実施

2024
（令和6年）

大学院医学系研究科看護学専攻博士後期課程の設置
看護学専攻修士課程を博士前期課程に変更

2021
（令和3年）

学生ラウンジを設置

2020
（令和2年）

新型コロナウイルス感染拡大にともない、
対面授業を基本としつつ、リアルタイム及びオンデマンドの
遠隔授業を併用したハイフレックス型授業を導入

2017
（平成29年）

医学部附属病院敷地内に
リップルテラスをオープン

女性医師支援のための
スキルズアッププログラムの設立

リレー・フォー・ライフ・ジャパン
日本初
学生主導のカレッジリレー開催

2014
（平成26年）

医学部附属病院へリポートの竣工

スキルズラボ棟の竣工

2016
（平成28年）

看護師特定行為研修を開始

地域医療教育研究拠点の設置

Towards 100 years

滋賀医大「三方よし」に込めた想い

開学50周年を機に、滋賀医大「三方よし」をコンセプトとして掲げました。
ご存じのように“売り手よし”, “買い手よし”, “社会（世間）よし”の「三方よし」は近江商人の経営理念をごく簡略に示すためのシンボル的標語として用いられています。

三方よし

三方よしの標語からすると、“売り手”, “買い手”, “社会”がそれぞれ独立したものであるかのようにイメージされますが、大切なのは“売り手”も“買い手”も“社会”の一員であるという考え方です。
よって、“売り手”と“買い手”が“社会”の中に含まれる構図となります。

滋賀医科大学 学章

学章は、“医”を中心に太さの異なる円が描かれています。この“医”が滋賀医大です。
この円は、外から中心に向かう“さざ波”の波動と、中心から外に向かう“一隅を照らす”光の波動を組み合わせたものであり、それぞれ、人々の医への期待とその期待に返す答えを表現しています。

滋賀医大「三方よし」
～ 人を大切にし、人を育てる ～

滋賀医大「三方よし」は、“学生・教職員”、“卒業生”が“県民・地域”の中に含まれる構図となります。

滋賀医大「三方よし」では、“売り手”と“買い手”というビジネスの関係ではなく、患者さんをはじめとする県民・地域の方々、卒業生の皆さんなど、本学に関わって下さる全ての方々を表現しています。

滋賀医大「三方よし」では、“県民・地域”からの期待を外側の円で表し、学章の円と同じ水色で表現しています。
その中にある、“学生・教職員”、“卒業生”がそれぞれの色の光を放つとともに、一丸となって、社会からの期待に応える構図になっています。
この一丸となって形成する“チーム滋賀医大”が、学章の中心にある“医”に相当します。

チーム滋賀医大

サブタイトルの「人を大切にし、人を育てる」は、滋賀医科大学で勤務する者が、これまで以上にお互いを思いやり、尊重しながら、人を育て、自身も成長できるように心掛けようというコンセプトです。
対話を重視することにより、目まぐるしく変動する世の中であっても、“チーム滋賀医大”で力を合わせ、「地域に支えられ、地域に貢献し、世界に羽ばたく大学」を目指したいと思います。

滋賀医大「三方よし」に基づく「チーム滋賀医大」人財育成ワーキンググループ

人財育成における課題の抽出及び分析を行い、育成に向けた計画等について検討を行うため、WG（ワーキンググループ）を設置しました。
WGには、理事、教員、看護師、メディカルスタッフ、事務職員が参画しており、“チーム滋賀医大”として取り組みを推進していきます。

キックオフとして、全教職員を対象に「コーチングマネジメント」講演会を実施しました。

関係者からのメッセージ

Messages from People involved

人類の健康増進に貢献
「一県一医大」

次の50年も「湖国とともに」

滋賀県知事
三日月 大造

滋賀医科大学開学50周年、誠におめでとうございます。

御承知のとおり、滋賀医科大学は、当時の県知事が誘致期成会の会長に就任し、県民挙げての誘致活動を展開した結果、滋賀の地に開学されました。今から50年前に誕生された時から、まさしく「湖国とともに」ある大学でございます。

以来、本県唯一の医科大学として、多くの卒業生の皆様が保健・医療の第一線で活躍され、また、高度・先進医療の提供や、地域医療の充実に向けた取組を積極的に展開されるなど、本県の医療水準の向上に大きく貢献いただいているところです。

これからの50年、医療をとりまく環境も変化し続けるでしょうが、引き続き「湖国とともに」ますます発展されることを切に願っております。

世界に羽ばたく
サステナブルで
アトラクティブな大学

祝　開学50周年

一般社団法人　滋賀県医師会
前会長　越智 眞一

滋賀医科大学が開学50周年を迎えられるに当たり、心よりお祝いを申し上げます。

貴大学は県下唯一の医育機関としての使命のもと、優秀な医師を育てるため、また、滋賀県民に安心・安全な医療を提供するために日々努力をされている姿に尊敬の念をおぼえます。

貴大学を卒業された皆さんも、県下を中心に羽ばたかれ、今や滋賀県の医療の中枢を担っていただいています。滋賀県医師会においても、3名の卒業生の方が理事として就任されており、日頃の診療に加え、医師会理事としても活躍いただいています。

今後も優秀な人材の育成に努めていただき、滋賀県のみならず、全国、国際レベルでも活躍されることを祈っています。

開学50周年に寄せて

公益社団法人　滋賀県看護協会
会長　草野 とし子

滋賀医科大学の開学50周年記念誌の発行を心よりお喜び申し上げます。

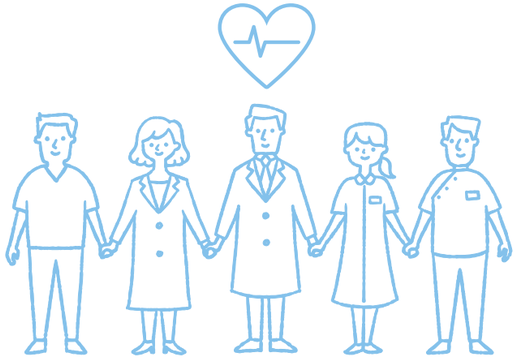
滋賀県で初の医学部を開学され、平成6年には看護学科を設置されました。

今滋賀県の健康寿命は、全国上位となっていますが、この基盤は、貴学の公衆衛生分野の諸先生方の指導により、現場の医療・看護職等が地域に根差した活動を推進してきた結果であると感じています。

常に地域医療全般をけん引していただき、看護分野でも多くの人材を輩出されるとともに、現場の看護職の人材育成や特定行為研修の開催等、専門性の高い看護職の育成にもご尽力いただいてまいりました。

滋賀の医療・看護人材の育成拠点として今後の益々のご発展を祈念してお祝いの言葉といたします。

Congratulations



新たな時代も「滋賀医大の応援団！」

しゃくなげ会
理事長　大原 克彦

滋賀医科大学開学50周年、おめでとうございます。

開学と時を同じく組織された献体篤志団体「しゃくなげ会」は、当時の社会情勢等から必要献体数の確保に困難を極めておりましたが、時を経た現在では、死生観の変化や会員希望者増など新たな情勢に即した体制構築を行い、次代に繋ぐ運営を目指しております。

開学以来の「ご遺体こそは尊き師なり」の精神を教育の基本とする丁寧な解剖学実習や「医師の臨床手技向上研修や医療技術の開発研究」に賛同し、やがて私達の子孫が、さらには世界人類が病の苦しみからより多く救われ、健康で幸福な、天寿を全う出来る世の中になるよう献体事業を通じて寄与し、新たな時代も「滋賀医大の応援団！」として寄り添い続けてまいります。

開学50周年おめでとうございます

医学科後援会
会長　仲　成幸

4千数百名の卒業生は様々な医療分野で大活躍しており、新設医科大学の枠組みは過去のものとなっています。50年間にわたり滋賀医科大学の発展に力を尽くしてこられた皆様に敬意と感謝を申し上げます。医学科後援会は保護者を中心に学生の良き理解者・サポーターとして、課外活動、学生主催行事、学外実習、国家試験対策などへの支援を行っています。以前には無かった組織ですが、医学教育の高度化に伴う学生の負担増に対するきめ細やかな支援を大学と共に行い、また保護者・学生・大学を結びつける役割も担っています。良い医療人の育成がより良い未来への礎となると思います。医学科後援会の活動が滋賀医科大学のさらなる発展に寄与することを心より願っております。

夢と思いをのせて、これからも

湖医会
会長　永田　啓

滋賀医科大学が、深刻な日本の医師・医療者不足と医療偏在による医療危機を何とかするために計画された国立の新設医大の一つとして開学してから50年。多くの卒業生を輩出し、その役割を着実にはたしてきました。

学生・卒業生をはじめ教職員・留学生・研究者など、さまざまな人が集い、関わり、お互いに影響をおよぼしながら、たくさんの夢や思いを紡いできた50年。こうした多くの方々のおかげで現在も発展を続けています。これからも、人を大切に、それぞれの夢や思いをのせて、飛び続けることができると信じています。これからの50年を作ってゆく後輩達にエールを!!

湖国に滋賀医大あり！

50th anniversary!

開学50周年に寄せて

看護学科後援会
前会長　大許 賢一

滋賀医科大学が開学50周年を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。

貴大学におかれましては、1974年の開学後、滋賀県内で唯一の医科大学として、多くの医療人の育成・輩出、高度で特色ある研究の発信、ならびに全人的医療の提供による地域社会への貢献を果たしてこられました。これもひとえに歴代の学長をはじめ、教職員の皆様方のおかげであり、これまでの献身的な取り組みに改めて感謝を申し上げるとともに、今後到来するAI社会において活躍する医療人の育成についても大いに期待するところであります。

最後に、滋賀医科大学の更なるご発展と、関連の皆様のご健勝、ご活躍を心から祈念いたしまして、お祝いの言葉といたします。

滋賀医科大学の研究50年の歴史と未来

理事（研究・企画・国際担当）・副学長
遠山 育夫

1. 開学（1974年）から独法化直前（2003年）まで

滋賀医科大学は1981年（昭和56年）3月にはじめての医学部卒業生を送り出し、その年の4月に大学院医学研究科博士課程が設置されました。大学院設置にともない学内の講座を研究内容によって集約し、生体医学情報系、高次調節系、再生・腫瘍解析系、臓器制御系、環境応答因子解析系の5専攻が設けられました。これと並行して研究支援設備の整備が進み、1980年（昭和55年）に医学部附属動物実験施設が、1982年（昭和57年）に医学部附属実験実習機器センターが設置されました。1989年（平成元年）には、本学初めてとなる附置研究所として、分子神経生物学研究センターが設置され、3部門で6名の教員が配置されました。1999年（平成11年）にはその業績が評価され、分子神経科学研究センターに改組し、5部門で教員10名に拡大されました。2002年（平成14年）には本学動物実験施設でサルES細胞が樹立されたことが高く評価され、動物生命科学研究センターが設立されました。2003年（平成15年）にカニクイザルを飼育するための5階建ての新棟が竣工し、最大800頭のカニクイザルを飼育できる国内最大規模の非ヒト霊長類の実験施設となりました。

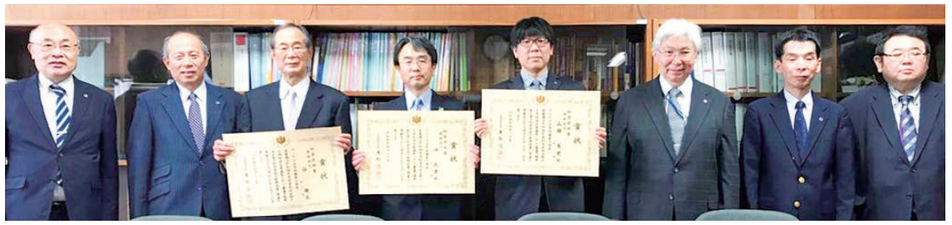
2. 独法化以降、現在までの歩み

2004 年（平成16年）に国立大学が法人化されました。当時の吉川隆一学長は、特色ある研究に大学の資源を集中させることで研究の活性化を図ることとし、「何でもできる大学ではなく、これができる大学」をスローガンに研究組織の改革を進めました。その方針のもと、本学の特色ある研究として①サルを用いた医学研究、②磁気共鳴（MR）医学、③生活習慣病医学、④地域医療支援研究、⑤神経難病研究の5つを選び、重点研究領域として定めました。そしてそれぞれの重点研究を推進する組織として、①動物生命科学研究センター、②MR医学総合研究センター、③生活習慣病予防センター、④医療福祉教育研究センター、⑤分子神経科学研究センターを改組あるいは新設しました。また、独法化により、国立大学においても、従来よりも柔軟に企業との連携を行うことが可能となり、本学においても、2005年（平成17年）に研究協力課が設置され、産学官連携業務部門が整備されました。2006年（平成18年）には、学内予算で6つのオープンラボと2つのオフィススペースで構成されるバイオメディカル・イノベーションセンターを設置し、企業の誘致を図りました。

第2期中期目標・中期計画期間（2010年から2015年）では、①サルを用いた医学研究、②神経難病研究、③MR医学研究、④生活習慣病研究、⑤総合がん研究を重点研究領域に定めて支援をしました。その結果として多くの業績がうまれましたが、特筆すべきは、生活習慣病研究の分野で優れた疫学研究を推進してきた本学の業績が認められ、2013年（平成25年）に、国内初となる疫学研究拠点としてアジア疫学研究センターが新築・開所したことです。これと時期を同じくして、アジア疫学研究センターを教育基盤とした「アジア非感染性疾患（NCD）超克プロジェクト」が、文部科学省の博士課程教育リーディングプログラムに採択されました。この頃には、医学の分野においても学際的研究、分野横断型研究が盛んとなり、細分化された専攻より1専攻としたほうが、融合形態の自由度が高いことから、2014年（平成26年）に医学研究科博士課程を5専攻から1専攻（医学専攻）に改組しました。

第3期中期目標・中期計画期間（2016年から2021年）では、①サルを用いた医学研究、②神経難病研究、③生活習慣病研究、④総合がん研究を重点研究領域に定めました。この期間の特筆すべき成果のひとつは、2018年（平成30年）に世界トップレベル研究拠点プログラム（WPI）の京都大学ヒト生物学高等研究拠点（ASHBi）に参画したことで、現在も継続中です。組織の面では、神経難病の解決を目指す目的で、2016年（平成28年）分子神経科学研究センターを神経難病研究センターに改組するとともに、新たに内科学講座（神経内科）を設け、基礎研究の成果を臨床応用する体制を整備しました。2021年（令和3年）4月には、アジア疫学研究センターを「NCD疫学研究センター」に組織再編し、より国際的視野に立った研究体制としました。

第4期中期目標・中期計画期間（2022年から現在）は、①サルを用いた医学研究、②神経難病研究、③生活習慣病研究、④総合がん研究を重点研究領域としました。一方、研究組織としては、2022年（令和4年）4月に、本学の有する研究センターを統合し、先端医学研究機構を組織しました。機構には、新たに次世代の研究者を育成する創発的研究センターと研究成果の実装化を担うBioMedical Business Development Unit（BBDU）を創設しました。こうした折に、谷徹名誉教授らが、本学でのマイクロ波手術機器開発での長年の功績がたたえられ、令和4年度文部科学大臣表彰・科学技術賞を受賞したことは、大きな喜びでした。また、2022年（令和4年）度には、本学は、AMEDのワクチン開発のための世界トップレベル研究開発拠点の形成事業のサポート機関に採択され、現在も継続中です。産学連携研究では、規程を整備して共同研究講座を誘致しました。その結果、企業との共同研究経費は、2021年（令和3年）度比369%という高い伸びを示しました。これらの産学連携研究の活性化は、本学への間接経費の増加につながっており、大学経営の健全化に寄与しています。



令和4年度文部科学大臣表彰・科学技術賞受賞

マイクロ波手術機器開発の業績が認められ、受賞。
世界で初めてマイクロ波で動作するハサミ型と鑷子型機器の開腹用と鏡視下用を製品化してマイクロ波を本格的に医療分野に導入することにより、クリアな術野を提供し、安全かつ手術時間も短縮され、患者さんへの侵襲、医療人への負担が少なくなり、手術予後の改善も期待される。医－工連携推進政策を実現し、医科単科大学での医－工連携推進の可能性を示せた。
中央3名が受賞者（左から谷徹先生、仲成幸先生、山田篤史先生）

3. 滋賀医科大学の研究の未来に向けて

50年の研究の歴史を振り返ってみると、「何でもできる大学ではなく、これができる大学」をスローガンに、特色ある研究を育成してきた本学の方針は、正しかったと思われます。一方で、本学は創発的研究センターに代表されるように、若手を中心とした自由な発想の挑戦的研究も支援してきました。今後も、重点研究の推進と萌芽的研究の育成という両輪が求められます。また、本学には、医学科に加え看護学科も存在します。両学科とも医学部という同じ学部に属することが本学の特徴のひとつで、両学科の教員が同じ研究プロジェクトに参画し、協力し合って研究を推進してきた点は、忘れてはなりません。2024年（令和6年）度には、大学院医学研究科看護学専攻博士後期課程も設置されました。医学領域のみならず、看護学領域、さらには両者の融合領域において、本学の研究がますます発展することが期待されます。

教育・研究・診療・地域医療の過去と未来

The Past and Future of Education, Research, and Medical Practice.

滋賀医科大学の教育改革の現状と展望

理事（教育・学生支援・コンプライアンス担当）・副学長
松浦　博

近年の医学教育で最も大きな出来事は、2010年9月に米国の外国人医師卒後教育委員（ECFMG）が、2023年以降、国際基準で認定された医学教育を行っている医学部以外の出身者には、米国で医師になる申請資格を与えない、と宣言したことだと思います。この宣言を契機に世界各国の医学部で、国民の健康の維持・増進という社会的使命を持つ医師の養成に関わる医学教育の質を見直そうという機運が生まれました。本邦でも、2015年12月に日本の医学部の医学教育の質を審査する日本医学教育評価機構（JACME）が設立されました。本学も、以下の様な大きな医学教育の改革を行い、2017年度に、JACMEによる医学教育分野別評価を受審し、幸いにも本学の医学教育が国際基準に適合していることが認定されました。

①診療参加型臨床実習（4～5年次）を実質化するために各診療科に教育医長を配置しました。また、低学年から患者と接する実習（1年次の附属病院体験実習など）を導入し、臨床実習の期間を57週から67週に拡充しました。このうち、地域医療教育研究拠点（NHO東近江総合医療センター、JCHO滋賀病院、公立甲賀病院）においても年間を通して臨床実習をご担当いただいており、厚くお礼申し上げます。

②これまでの「プロセス基盤型教育」（各講座、教員に委ねられた授業を積み重ねていき、学生が各学年で着実に学修を行っていく教育）から「アウトカム基盤型教育」（大学の使命・理念に基づいた卒業時アウトカム（卒業生が身に付けるべき知識・技能・態度）をまず設定し、それを達成するためのカリキュラムを編成する）に改革を行いました。

③PDCAサイクルを適切に機能させることによって、教育・学修等に関する内部質保証や継続的改良を行う体制を構築しました。そのためにチェック機能を担う教学活動評価委員会を新たに設置して、IR室と連携しながら継続的改良に必要な分析を行っています。

④学生が教務系委員会の正式委員として参画し、学生の意見も取り入れながら教育を行っています。

なお、医学教育分野別評価は継続的な受審が求められており、本学は2024年7月に2巡目評価を受審します。

近年、医学・医療・看護学の分野でも、プログラミング、人工知能（AI）、情報科学などの新しい学問領域がますます重要になってきています。本学でもこれらの領域に関して、基盤的な内容に加えて医療現場での応用例なども積極的に取り入れて教育を行っており、本学の医学科・看護学科のカリキュラムは、内閣府・文部科学省・経済産業省の3府省が連携した「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度（リテラシーレベル）」により認定されています。今後、AI、データサイエンスなどを活用した新しい医療技術の創出に寄与できる人材育成を目指していきたいと思います。

看護学科では、2024年4月から大学院医学研究科看護学専攻博士後期課程の設置が文部科学省から認可されるという大変嬉しいニュースがあります。設置する部門は、生涯発達看護実践科学部門とケアシステム創成看護科学部門で定員は3名です。生涯発達看護実践科学部門では人の生涯にわたる多様な健康課題に対応できる看護人材を、ケアシステム創成看護科学部門では病院から地域への切れ目ない看護ケアシステムを創成・実践できる看護人材の養成を行い、滋賀県における看護力の向上に寄与したい、と考えています。

滋賀医科大学では今後も、本学の理念、使命に基づき、また時代の変革や要請にも適切・迅速に対応しながら、信頼される医療人の育成に取り組んで参りますので、引き続き忌憚なきご提案・ご意見をお寄せくださいますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

診療の過去と未来

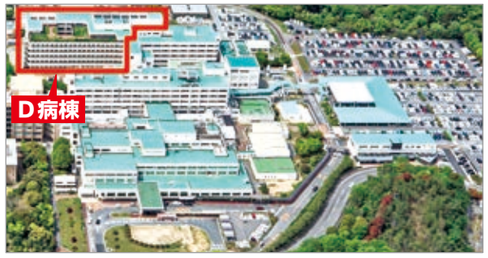
理事（医療・労務担当）・副学長・病院長
田中 俊宏

滋賀医科大学医学部附属病院は昭和49年10月の開学後、4年遅れて昭和53年10月に開院となり、ここから歴史が始まりました。図1をご覧ください。これは病院開設当時の本院です。大きな節目は病院再開発で、平成19年8月にD病棟竣工（C病棟や外来棟は改修）となり、現在に至っています。図2と3をご覧ください。図3は再開発終了時の本院の姿です。

昭和53年は大学では28講座11学科目、15診療科でした。その後着実に臨床医学講座と臨床診療科は充実を続けています。近年では、腫瘍内科・臨床遺伝相談科・病理診断科・形成外科・脳神経内科学講座・呼吸器内科学講座・血液内科学講座の設置を進めました。国や滋賀県の医療政策にも協力をしており、がんでは滋賀県がん診療高度中核拠点病院や国のがんゲノム医療拠点病院の指定を受けています。難病では指定医療機関、アレルギーでは滋賀県アレルギー疾患医療拠点病院、災害では災害拠点病院になるなど多くの役割を引き受けています。本院は特定機能病院ですので、高度の医療の提供（医療）、高度の医療技術の開発（研究）、高度の医療に関する研修（教育）を実施する能力を備えた病院であり続けなければなりません。そのため機能強化棟（完成時にはE病棟）を建設中です。図4をご覧ください。令和8年に完成しますこの機能強化棟により、救急・放射線治療・消化器内科機能がさらに充実します。これからも滋賀県の医療の最後の砦として、高度な医療を支えますので、ご支援をよろしくお願いいたします。教育に関しては、卒後教育（例えば医師では研修医の教育と専門医の教育）を通じて、優秀な医療人の育成をしますし、研究では、先進医療の実施などを行います。県民の皆様のご支援とご協力をよろしくお願いいたします。

【図1】 できたばかりの病院

【図2】 再開発の前の病院



【図3】 再開発後、新設されたD病棟

【図4】 建設中の機能強化棟（E病棟）

教育・研究・診療・地域医療の過去と未来

The Past and Future of Education, Research, and Medical Practice.

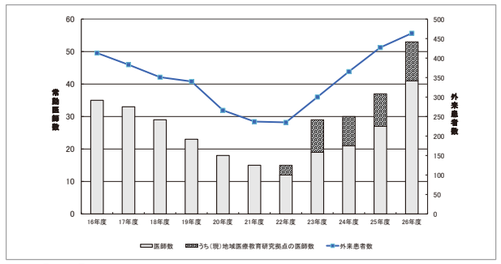
地域医療の過去と未来

理事（地域医療担当）
辻川 知之

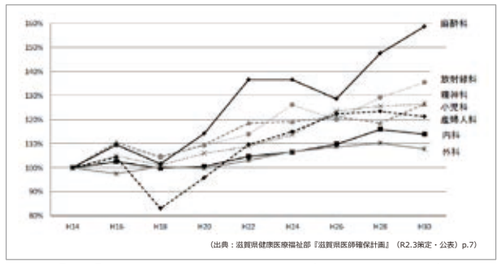
滋賀県の地域医療は、滋賀医科大学の開学から50年の間にどのような歩みがあり、またこれからどのような方向に進むべきでしょうか。

本学の卒業生がまだ少数であった昭和期では、滋賀県内の病院は主に近隣他府県の医局から派遣された医師によって支えられてきました。当時は医局の方針により、若手医師は大学から一般病院に派遣され、数年後に研究や教育のため再び大学に戻るというシステムが一般的でした。平成以降になると、滋賀県の地域医療に従事する本学の卒業生が徐々に増え始め、県内の病院で各診療科の勤務医として働く医師のほか、新規に開業する医師も出てきました。その結果、本学の卒業生は現在、滋賀県医師総数の40%近くを占めるに至っています。

しかしながら、本学の開学以降、わが国の地域医療をめぐる状況は決して順調に推移してきたわけでありません。大きな変化の一つとして、平成16年から施行された医師の新臨床研修制度が挙げられます。この制度により、特に最初の1～2年間は、大学に所属する新人医師がゼロとなるため、人手不足を補う意味で市中の一般病院から大学に戻る医師が急増しました。地域医療を支えていた中小規模の一般病院は、またたく間に医師不足に陥り、滋賀県でも一部の病院は規模の縮小を余儀なくされました。そのような状況の中で、本学は平成22年から（現）地域医療教育研究拠点（図1）を設置し、地域医療を担う人材育成に注力してきたところ、勤務医数の回復につながった病院（NHO東近江総合医療センター（旧・NHO滋賀病院））もあります（表1）。ただし、若手医師が臨床研修を希望する病院や開業する地域は人口の多い地域に集中していることや、専門領域として緊急の処置や夜勤が少ない診療科を選択する傾向があることから、地域間や診療科間の格差拡大が続いています（表2）。

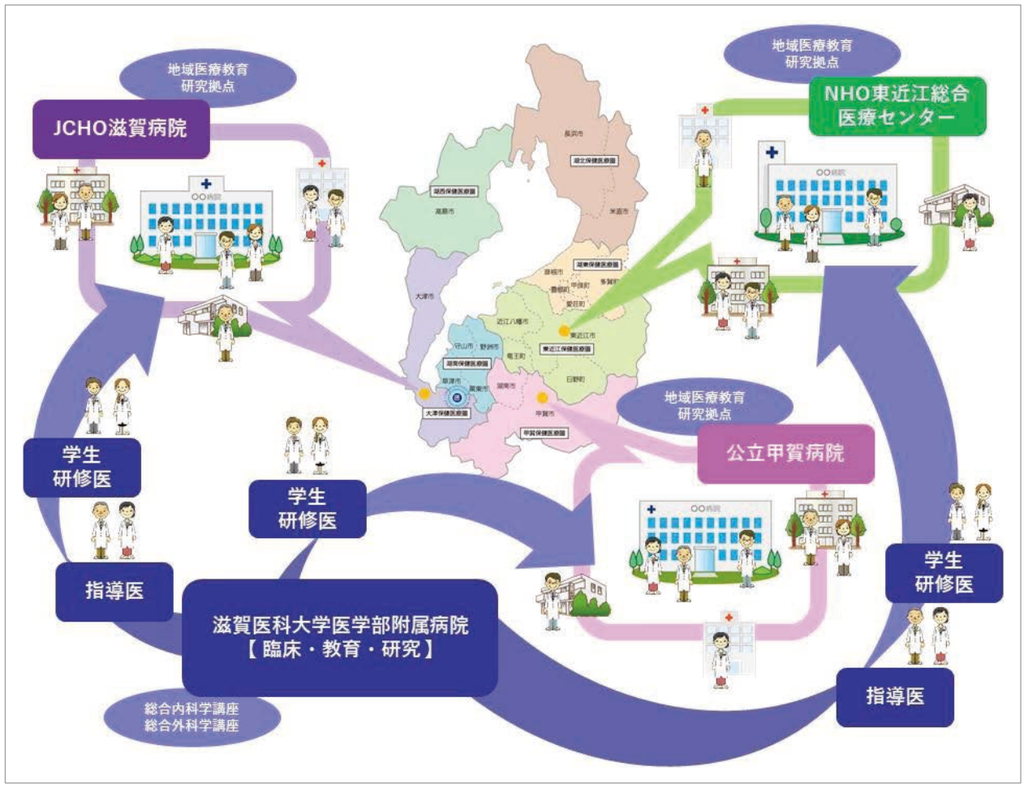


【表1】 NHO東近江総合医療センターにおける新臨床研修制度開始（H16年）後の医師数減と（現）地域医療教育研究拠点の設置（H22年）後の増加及び外来患者数の変化

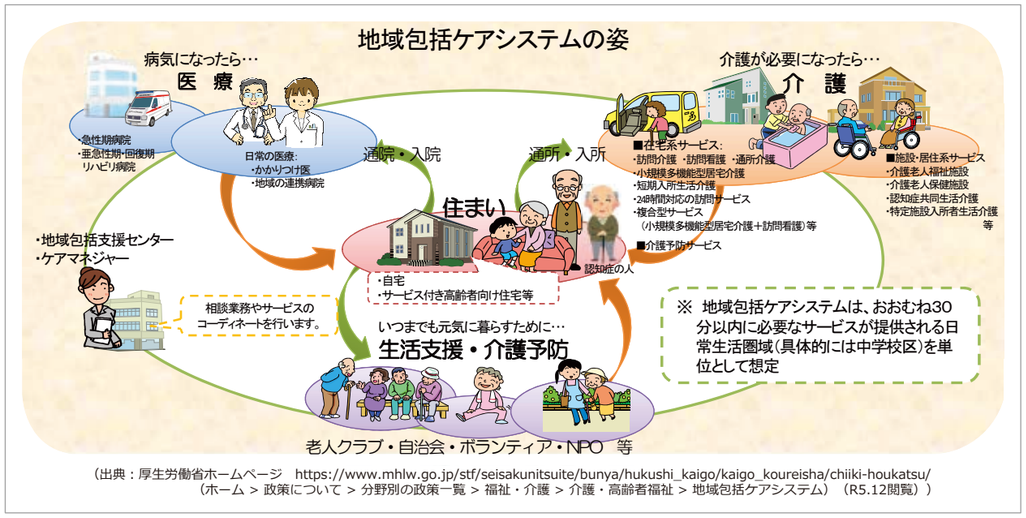


【表2】 診療科別医師数の増減率（H14年＝100%）

さらに、近年の地域医療の新たな問題として、医療ニーズの社会的変化が挙げられます。すなわち、少子高齢化に伴う疾病構造の変化と、人口減少に伴う地域格差の拡大です。地域医療の現場では、もはや壮年期の人を治療して社会復帰してもらうための医療よりも、日常的に介護など周囲の支援が必要な高齢者が、感染症や骨折などで入退院を繰り返すような事例が急増しています。このような状況から、高齢者中心の多様化した医療に対応していくためにも、多くの総合診療医を育成することが、今後の地域医療を維持するための当面の課題です。ただし、今後人口の減少が想定される地域では、医療や介護を担う人材不足の深刻化が予測されるため、本学は地域医療を担う医療人を単に育成するだけでなく、医療・看護・介護を含め、地域全体で高齢者を支える地域包括ケアシステム（図2）を動かすためのリーダー教育や、常に最新のICTを積極的に取り入れるための医療DX教育の深化と充実が必要となるでしょう。



【図1】 滋賀医科大学地域医療教育研究拠点



（出典：厚生労働省ホームページ https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/
（ホーム ＞ 政策について ＞ 分野別の政策一覧 ＞ 福祉・介護 ＞ 介護・高齢者福祉 ＞ 地域包括ケアシステム）（R5.12閲覧））

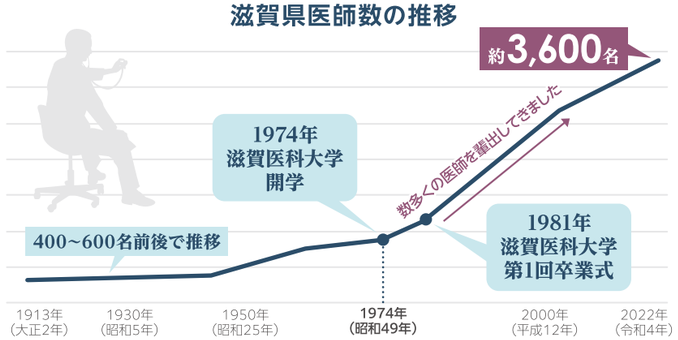
【図2】 地域包括システムの中での医療のあり方

数字でみる 滋賀医科大学 50年

State in Figures

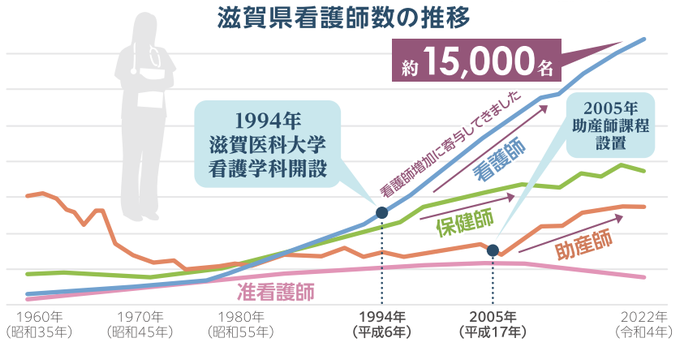
滋賀県医師数の推移

※本グラフは推移の傾向を表したものです



滋賀県看護師数の推移

※本グラフは推移の傾向を表したものです



留学生数(累計)

251名/29カ国

(2024年5月時点)

看護学科修士終了266名

教　授 28名
准教授 30名
講　師 16名

(2021年修了生の卒後状況調査)

卒業生数

医学科 4,444名
看護学科 1,798名
計 6,242名

(2024年5月時点)

学位授与者数

修士(看護学専攻) 301名
博士(医学専攻) 1,507名
計 1,808名

(2023年度末時点)

卒業生が本学大学院も卒業する割合

医学科 30.2%
看護学科 4.4%

(2023年IR室調べ)

開学以来の総論文数

12,034本

Scopusデータベースに収載されている論文
(主として英文誌のみ)

(2024年2月時点)

国際交流協定締結大学数

13カ国/26機関

(2024年5月時点)

国家試験合格率

(2023年度)

医　師 93.5% (全国平均 92.4%)	看護師 100% (全国平均 87.8%)
保健師 100% (全国平均 95.7%)	助産師 100% (全国平均 98%)

卒業生の滋賀県内進路状況

医学科 41.7%
看護学科 57.9%

(2023年度)

学部卒業生の教授就任

101名

医学科99名/看護学科2名

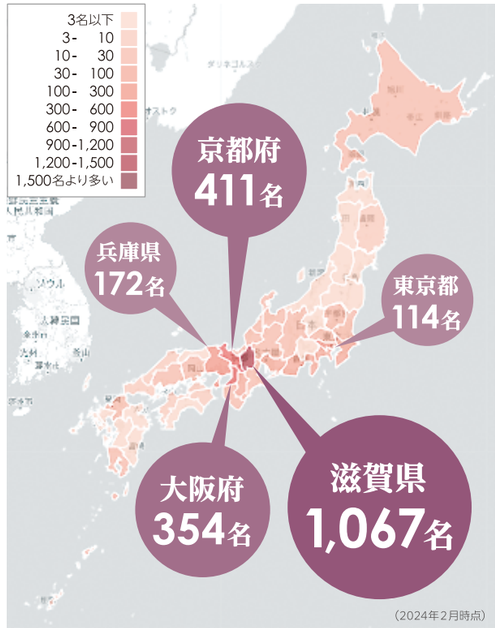
(2024年湖医会調べ)

入学者に占める滋賀県出身者率

医学科 18.9%
看護学科 38.3%

(2024年度)

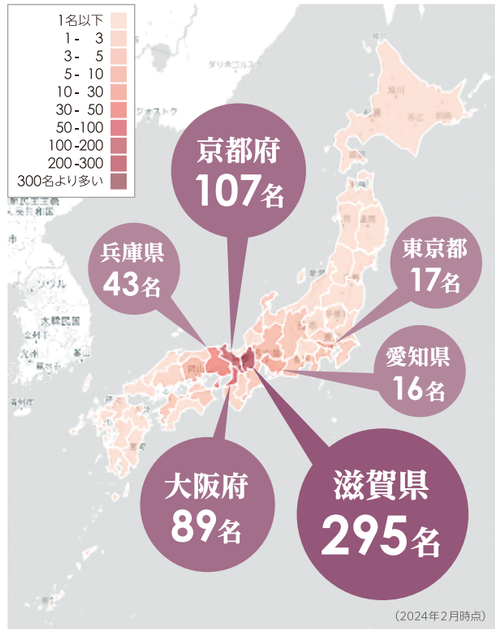
医学科卒業生の都道府県別就業先



(2024年2月時点)

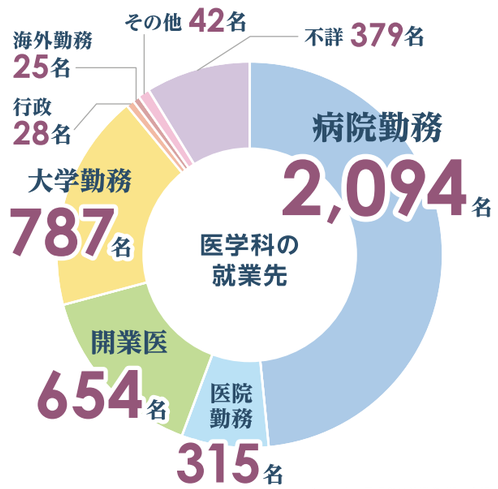
Check! 医学科卒業生は、滋賀県を中心とした近畿地方を中心に全国で活躍されています。

看護学科卒業生の都道府県別就業先

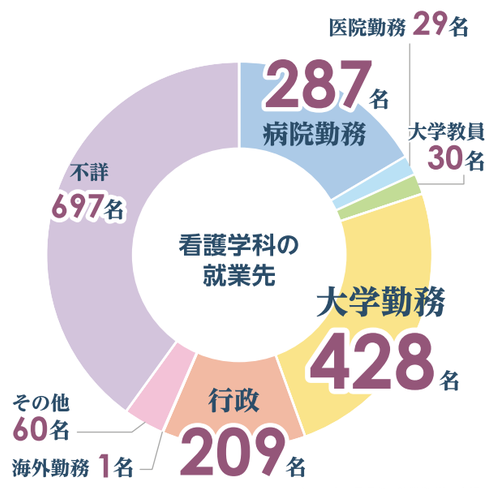


(2024年2月時点)

Check! 看護学科卒業生は、滋賀県を中心とした近畿地方を中心に全国で活躍されています。



(2024年2月現在の就業先/湖医会調べ)



(2024年2月現在の就業先/湖医会調べ)

滋賀医科大学 50景

1982年の工事の様子

開学当時の病院玄関前には噴水がありました!

校舎入口に下駄箱!

開学当時の校舎内は土足厳禁だった?!

1990年頃の中庭

がん征圧チャリティーイベント　リレー・フォー・ライフ・ジャパン

ひょうたん池前(現:D病棟)で映画「火々」の撮影(2004年)

小児科病棟

DMAT訓練

コードブルー訓練

開院数年の病棟　今はなつかしいナースキャップ・黒電話・入院患者呼び出し表等々

1991年頃の附属病院ロビー

昔の病院職員食堂

電子カルテ導入前は紙カルテをエアシューター・ケースコンベアで外来に搬送していました

地域参加型学生支援事業「里親」
宿泊研修の一コマ
びわこ学園医療福祉センター草津にて

附属病院七夕飾り

附属病院クリスマスイルミネーション

阪神大震災における支援活動(1995年)

◀医師派遣のマイクロバス

教職員が作ったおにぎり
▼

▲ 解剖体慰霊碑
(琵琶湖を見下ろす比叡山横川に1977年建立)
▼ 比叡山での解剖体慰霊法要

コロナ禍では2021年から2023年にかけて、ワクチン接種会場へ多数の医師を派遣しました

マルチメディアセンター横の庭園夕景

授業風景
今昔

昔の学生食堂

「滋賀医大新聞」自治会新聞特別委員会(第1～7号)

「湖都」体育会機関誌(創刊号～第4号)

医大草創期の学生による刊行物。
「学生による開学十周年記念誌」は、学生8割超の賛同率を背景に、大学・県・医師会・びわ湖放送・卒業生の支援を受けて、母校のあるべき将来像を問うた、記念碑的作品。

第一回琵琶湖横断遠泳大会に参加した水泳部員(1984年)

1976年から続く
浜松医科大学との交流会

開学初期頃の船上ダンスパーティー

今も昔も熱い!! 若鮎祭

昔の若鮎祭水上ステージ

50周年記念事業に関わる
学生の想い

撮影:澤井 千優(医学科 5年)

WG 学生委員名簿

WG名	医学部 学科	氏　名
施設整備	医学科第5学年	西久保　遼
施設整備	医学科第4学年	宮口　凜
施設整備	医学科第3学年	越田　智樹
施設整備	医学科第3学年	秋吉　研二
記念式典	医学科第2学年	伊藤　槙
国際シンポジウム	医学科第3学年	切通　舞
ホームカミングデー	医学科第5学年	稲田　好哉
公開講座	医学科第5学年	沖山　翔太
産学連携	医学科第3学年	松山　峻大
広報	医学科第5学年	上原　希
記念誌	医学科第5学年	永福　大暉
記念品	医学科第5学年	堀井　裕登
学生企画	医学科第5学年	上原　希
学生企画	医学科第5学年	川合　惇也
学生企画	医学科第5学年	沖山　翔太
学生企画	医学科第3学年	野原　周郎
学生企画	看護学科第2学年	生野　一華
学生企画	看護学科第2学年	鍛田　菜穂
学生企画	看護学科第1学年	倉田　綾梨
学生企画	看護学科第1学年	倉田　未悠
学生企画	看護学科第1学年	相井　優萌
学生企画	看護学科第1学年	西田　日和

施設整備WG
（医学科5年　西久保 遼）

大きく生まれ変わった中庭と学生食堂ですが、いかがでしょうか?
施設整備WG学生委員一同、皆さんに永く愛される場所になることを願っています。
2022年3月から始動した当WGですが、正直こんなに大きな話になるとは予想していませんでした(執筆時点で現在進行形)。コンセプト具体化のためのWG委員の先生方との議論や、学生からの意見集約などは、ほんの序の口。 特に中盤から、物価高騰や人手不足などの社会情勢に翻弄され(主に予算的な意味で)、デザインがようやく決まるかな?と思ったところで入札として仕切り直し、など産みの苦しみがありました。ですが、会議を経るごとに新しいデザインが出来上がってきて、それを学生として最初に見られたことは、とても達成感がありました。もっとも、一番ご苦労されたのは事務局の皆さんでした。この場を借りまして、事務局の方々のご尽力に心から御礼申し上げます。

記念式典WG
（医学科2年　伊藤 槙）

当WGは、開学50周年記念式典の開催へ向けて、日程や会場、基本コンセプトに始まる概略から、プログラムや記念講演の内容、講演者や招待者に至る詳細までの立案と、講演や来賓の依頼、招待者の案内や出欠確認などの実務を行います。「これまで」の50年間を振り返り「これから」の50年間へ向けて一丸となって飛び立つ場としての本式典について、本学の過去の記念式典や他大学の50周年記念式典を参照しつつ議論しながら、本学出身の先生方から本学開学時の時代背景や守山に校舎があったころのお話、卒業式で学長先生と握手されたお話をお聞きし、50年という歴史の重みやその記念事業に携われる喜びを感じています。 本式典が皆様にとって、「50周年」の喜びを分かち合い絆を深められるものとなりましたら、記念式典WGの一員として幸甚に存じます。

国際シンポジウムWG
（医学科3年　切通 舞）

国際シンポジウムWGでは、学部生・高校生向けの留学シンポジウム開催及び、マレーシア国民大学とのジョイントディグリープログラム開設に向けて準備を行っています。
学部生・高校生向けの留学シンポジウムでは、学部生のみならず滋賀県と京都府下の高校生にも留学の魅力を感じてもらえるよう、留学経験がある学部生・若手医師、米国での臨床診療歴を持つ医師と幅広い世代からの体験談を紹介していただきます。また、ジョイントディグリープログラムでは、マレーシア国民大学からの来賓の先生方にもご講演いただきます。
今後、滋賀医科大学の国際交流がますます活発になるよう、本学から留学を行った学生委員として邁進いたします。

ホームカミングデーWG
（医学科5年　稲田 好哉）

当WGでは、50周年に合わせてOB・OGの方をお招きしてこれまで、現在、そしてこれからの滋賀医大についてをお伝えするとともに、各世代間の交流を深めるホームカミングデーの開催を計画しております。 先日は2023年度の若鮎祭に合わせて、プレ開催をさせていただきました。そこでは対面だけで30名弱の方に参加していただき、学内ツアーや展示、各講演などを通して学外・学内の関係者が交流しました。いただいた貴重なご意見も合わせて2024年の本開催にはより多くの滋賀医大関係者皆様に楽しんでいただける、そして滋賀医大の出身・関係者で良かったと思えるようなイベントとしたいと思っております。

学生企画WG
（医学科5年　川合 惇也）

当WGは記念すべき節目の時を盛大に祝福すべく、医学・看護学生12名を中心に学生ならではの視点でプロジェクトを展開しています。 短期間での作業が必要な時は類稀なるチームワークを発揮し、また先生や学生課(現・学務課)、総務企画課の方々のお力添えのお陰で、学業の傍ら楽しく記念事業に取り組むことができています。 関係者の皆様におかれましては、この場をお借りして心より感謝申し上げます。 私たちが最も力を入れて取り組むプロジェクトは、本学オリジナルマスコットキャラクター制作です。 滋賀県や滋賀医大にゆかりのあるポップで可愛いキャラクターを目指しました。

公開講座WG
（医学科5年　沖山 翔太）

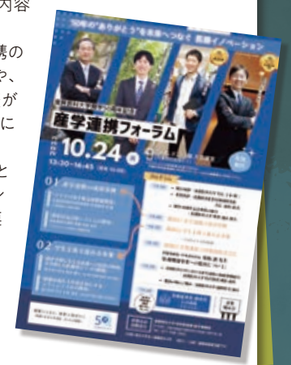
当WGは、支えてくださった地域の皆さまへ感謝の気持ちを込めて、本学が歩んできた歴史や今後の使命をお伝えすべく、滋賀県内4箇所・計4回の市民公開講座の開催を運営しています。 市民の皆さまのニーズに寄り添えるよう、申込フォームや申込用紙に質問・ご意見を記入できる欄を設け、会場で質問を紹介された方にプレゼントを進呈し交流機会を持つことで、市民の皆さまと一緒に講演会をつくっていきます。
講演会では、本学管弦楽団や滋賀県内の高校吹奏楽部が演奏を披露するなど、学生の普段の活動成果を披露する場としても機能しています。 私自身、このような大規模講演企画の運営の一端を担えることは大変光栄です。お世話になっている方々に心より感謝いたします。

広報WG
（医学科5年　上原 希）

広報WGでは発足当初から50周年記念特設サイトやブランディンググッズについて議論を重ねてきました。 特に特設サイトの内容は滋賀医大のここまでの歴史を感じることができますし、今まさに50周年という一つの区切りを迎えようとしている中でそれぞれの道で活躍するOB・OGの先生方や学生の活躍を垣間見ることができます。WG唯一の学生委員の私としましても、自治会長として、また1人の滋賀医大生として、これからももっと母校の魅力を発信することができたら、と思います。WGでの活動を通じて、本当に多くの様々な経験を授けてくれた母校への恩返しが少しでもできれば私にとってはこの上ない幸せです。

産学連携WG
（医学科3年　松山 峻大）

産学連携WGでは、滋賀県内の企業・団体様と滋賀医科大学との連携を強化することを目的として2023年10月24日に「産学連携フォーラム」(場所:コラボしが21)を行いました。 当日は、本学関係者から「産学連携の成功事例」や「学生主体で進める事案」に関して4名の講演が行われたのち、ご協力いただいております企業様から講演を実施いただきました。
学生の発表としては、医学科6年で社会医学講座(衛生学)所属の石山博章と、医学科3年で生命科学講座(化学)の松山峻大の2名がそれぞれで取り組んでいる内容についての講演を行いました。
講演の後は本学における産学連携の成功事例を中心とする企業展示や、本学医療従事者・研究者との面談が行われ、多くの企業・団体の方々に参加いただきました。
この機会をきっかけに企業と大学との連携がより進んでイノベーションが推進すると共に、学生が産学連携を基とする社会実装に取り組む追い風になることを願います。そして、地域から世界へと羽ばたいていける医療人を目指して、今後も精進してまいります。



記念誌WG
（医学科5年　永福 大暉）

はじめに、本記念誌の製作に関わってくださった全ての皆様に感謝申し上げます。50周年の節目となる今回、私はまず学生アンケートを行いました。 予想以上に多くの学生から回答を得、その結果も踏まえ本冊子とオンライン版の2つの形式の記念誌を製作しました。 本冊子のコンセプトは「アルバムブック」となっており、過去から現在に至るまでの多くの写真を楽しんでいただければ幸いです。 一方、オンライン版では各研究室・部活動の歴史や現在の活動についての文章も寄せていただきました。
本冊子は学生・教職員をはじめとして広く頒布されます。いずれの形式の記念誌も皆様の過ごされた時代を回顧しながら、また、今後の滋賀医科大学への期待に胸を膨らませながらお楽しみいただければ幸いです。

記念品WG
（医学科5年　堀井 裕登）

当WGでは記念品作成を行いました。いかにして滋賀医科大学らしさ、滋賀県との関わりを表現できるかをWG内で検討しました。 結果として一つは大学校舎、病院をデザインした付箋、もう一つは地域とのつながりを意識し滋賀県ならではということで信楽焼のマグカップを選択しました。 付箋に関してはデザインだけでなく使いやすさも考慮し、またマグカップは琵琶湖やヒポクラテスの樹を意識した鮮やかな青緑色の色合いに仕上げていただいております。 生協でも取り扱っていただいておりますので、是非みなさんに長く使って頂ければと思っております。 一学生として50周年という節目に関わることができ大変貴重な経験をさせていただいたと感じております。

※ 名簿・学年表示は2024年1月時点

組織等 Organization

組織機構図 ORGANIZATION CHART

2024年5月時点

医学部

医学科 Schools of Medicine

基礎医学講座 Basic Medical Science

- 生命科学講座 Fundamental Bioscience
- 医療文化学講座 Culture and Medicine
- 解剖学講座 Anatomy
- 生理学講座 Physiology
- 生化学・分子生物学講座 Biochemistry and Molecular Biology
- 病理学講座 Pathology
- 薬理学講座 Pharmacology
- 社会医学講座 Social Medicine

臨床医学講座 Clinical Medicine

- 内科学講座 Internal Medicine
- 小児科学講座 Pediatrics
- 精神医学講座 Psychiatry
- 皮膚科学講座 Dermatology
- 外科学講座 Surgery
- 整形外科学講座 Orthopaedic Surgery
- 脳神経外科学講座 Neurosurgery
- 耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座 Otorhinolaryngology-Head and Neck Surgery
- 産科学婦人科学講座 Obstetrics and Gynecology
- 泌尿器科学講座 Urology
- 眼科学講座 Ophthalmology
- 麻酔学講座 Anesthesiology
- 放射線医学講座 Radiology
- 歯科口腔外科学講座 Oral and Maxillofacial Surgery
- 臨床検査医学講座 Clinical Laboratory Medicine
- 救急集中治療医学講座 Critical and Intensive Care Medicine
- 総合診療学講座 General Medicine
- 臨床腫瘍学講座 Medical Oncology
- 総合内科学講座 Comprehensive Internal Medicine
- 総合外科学講座 Comprehensive Surgery
- 形成外科学講座 Plastic Surgery
- 薬物治療学講座 Pharmacotherapeutics

看護学科 School of Nursing

- 基礎看護学講座 Fundamental Nursing
- 臨床看護学講座 Clinical Nursing
- 公衆衛生看護学講座 Public Health Nursing

共同研究講座 Joint Research Department

- 再生医療開拓講座 Regenerative Medicine Development
- 生命情報開拓講座 Biocommunication Development
- 分子工学研究所 機能性材料共同研究講座 Molecular Engineering Institute,Functional Materials Laboratory
- 分子工学研究所 新材料分子設計共同研究講座 Molecular Engineering Institute,Molecular Design of New Materials Laboratory
- ミスフォールドタンパク質関連疾患治療学講座 Therapeutics for Protein Misfolding Diseases
- 分子工学研究所 サステナブル素材開発共同研究講座 Molecular Engineering Institute, Sustainable Materials Development Laboratory
- スポーツ・運動器科学共同研究講座 Sports and Musculoskeletal Medicine
- 先進的医療研究開発講座 Advanced Medical Research and Development
- 骨軟骨代謝・関節機能再建学講座 Osteochondral Metabolism and Joint Reconstruction

医学部附属病院 University Hospital

診療科 Clinical Departments

- 循環器内科 Cardiovascular Medicine
- 呼吸器内科 Respiratory Medicine
- 消化器内科 Gastroenterology
- 血液内科 Hematology
- 糖尿病内分泌内科 Diabetology, Endocrinology and Metabolism
- 腎臓内科 Nephrology
- 脳神経内科 Neurology
- 腫瘍内科 Medical Oncology
- 小児科 Pediatrics
- 精神科 Psychiatry
- 皮膚科 Dermatology
- 消化器外科 Gastrointestinal Surgery
- 乳腺・小児・一般外科 Breast / Pediatric / General Surgery
- 形成外科 Plastic Surgery
- 心臓血管外科 Cardiovascular Surgery
- 呼吸器外科 Respiratory Surgery
- 整形外科 Orthopaedic Surgery
- 脳神経外科 Neurosurgery
- 耳鼻咽喉科・頭頸部外科 Otorhinolaryngology-Head and Neck Surgery
- 母子診療科 Maternal and Fetal Medicine
- 女性診療科 Female Pelvic Surgery and Reproductive Medicine
- 泌尿器科 Urology
- 眼科 Ophthalmology
- 麻酔科 Anesthesiology
- ペインクリニック科 Pain Management Clinic
- 放射線科 Radiology / Radiation Oncology
- 歯科口腔外科 Oral and Maxillofacial Surgery
- リハビリテーション科 Physical Medicine and Rehabilitation
- 臨床遺伝相談科 Medical Genetics
- 病理診断科 Diagnostic Pathology
- 救急科 Emergency
- 総合診療科 General Medicine

中央診療部門 Central Clinical Sections

- 救急・集中治療部 Emergency and I.C.U.
- 光学医療診療部 Endoscopy
- 血液浄化部 Blood Purification
- 総合周産期母子医療センター Perinatal Center
- 無菌治療部 Aseptic Care Unit
- 腫瘍センター Cancer Center
- 検査部 Central Clinical Laboratory
- 放射線部 Radiology Service
- 輸血・細胞治療部 Blood Transfusion and Cell Therapy Center
- リハビリテーション部 Rehabilitation Section
- 病理部 Diagnostic Pathology
- 栄養治療部 Clinical Nutrition

中央手術部門 Central Surgery Sections

- 手術部 Central Surgical Unit
- 材料部 Central Supply
- 臨床工学部 Clinical Engineering

診療・教育・研究支援部門 Clinical, Education & Research Support Sections

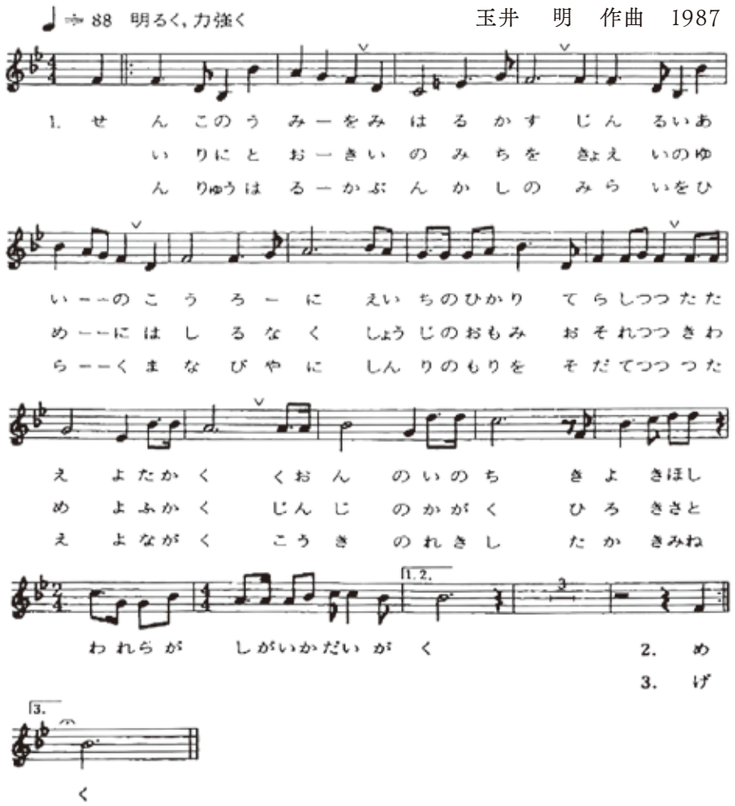
- 病歴部 Medical Records
- 医療情報部 Medical Informatics and Biomedical Engineering
- 医療研修部 Medical Training Division
- 臨床研究開発センター Center for Clinical Research and Advanced Medicine
- 再生医療室 Center for Regenerative Medicine
- 看護臨床教育センター Clinical Education Center for Nurse
- 看護師特定行為研修センター Advanced Nurse Training Center
- 医師臨床教育センター Clinical Education Center for Physicians
- 患者支援センター Patient Support Center
- 高難度医療・未承認医薬品等管理室 Intractable Diseases Treatment Technology and Unapproved Medication Assessment Management Office

School Song

学 歌

学歌動画は
こちらのQRコードから

友吉 唯夫　作詞
玉井　明　作曲　1987



一、 千古の湖を　見はるかす
人類愛の　高楼に
叡知の光　照らしつつ
讃えよ　崇く　久遠の生命
清き星　われらが滋賀医科大学

二、 名利に遠き　医の道を
虚栄の夢に　奔るなく
生死の重み　畏れつつ
究めよ　深く　仁慈の科学
広き郷　われらが滋賀医科大学

三、 源流遥か　文化史の
未来を拓く　学舎に
真理の森を　育てつつ
伝えよ　永く　光輝の歴史
高き峰　われらが滋賀医科大学

作詞者の友吉唯夫氏は、本学の泌尿器科学講座の初代教授で、医学以外にも造詣が深く、
開学以来40年以上にわたって「医学史」の講義を担当されました。
作曲は、友吉氏の紹介により玉井明氏(華頂短期大学名誉教授、東京藝術大学音楽学部作曲科卒業)が担当されました。

滋賀医科大学
開学50周年記念誌
WG名簿

役職	氏名
委員長	谷　眞至
副委員長	三浦　克之
委員	石井　真理子
〃	石垣　宏仁
〃	永福　大暉
〃	川崎　拓
〃	九嶋　亮治
〃	白坂　真紀
〃	多賀　崇
〃	西村　正樹
〃	馬場　重樹
〃	森野　勝太郎
（前委員長）	野﨑　和彦

ご寄付を賜りました皆さま

この度は、滋賀医科大学開学50周年「三方よし」未来募金にご寄付をいただき、誠にありがとうございます。
ご寄付は、滋賀医大「三方よし」の実現に向けた記念事業・イベント等の実施のために活用させていただいております。
ご厚情に感謝申し上げます。

あとがき

2024年10月1日は滋賀医科大学開学50周年にあたります。 単なる1通過点であるという方もいらっしゃるかと思いますが、次の50年すなわち100周年に向けての折り返し点です。 今後の滋賀医科大学を地域とともに背負って立つ人々のためにも、これまでの50年の歴史を振り返り、多くの方々が本学の発展に尽力されてきた軌跡を知る良い機会かと思います。

時代の変遷とともにそれに即した記念誌が望まれています。 本記念誌がこれまでの記念誌と最も異なるのはwebと連動したハイブリッド版だということです。 今後も、時代の流れや技術革新に柔軟に応じることが滋賀医科大学には必要ですが、記念誌も同様に時代とともに変わっていきます。50年後にはどのようになっているのか想像すらできません。しかしながら、今回の50周年記念誌は滋賀医科大学50周年に関わる皆様のご理解とご支援あっての記念誌であり深謝申し上げます。また、50周年記念誌編集事務局や50周年記念誌ワーキングの皆様にも深謝申し上げます。そして、何よりも滋賀医科大学50周年のこの瞬間に携われることに感謝したいと思います。

滋賀医科大学開学50周年記念誌WG 委員長　谷　眞至

滋賀医科大学
開学50周年記念誌

発行日　2024年10月1日
編　集　滋賀医科大学開学50周年記念誌ワーキング
発　行　滋賀医科大学
〒520-2192 滋賀県大津市瀬田月輪町
https://www.shiga-med.ac.jp/

湖国とともに、世界に羽ばたく

医療のあゆみ半世紀、さらなる飛躍へ

SHIGA UNIVERSITY OF MEDICAL SCIENCE

50th 滋賀医科大学

記念誌(Web版)